

# Fieldworker

【服飾・保存修復】

## 能装束の修復

服飾文化・染織文化財保存修復研究 福山 和子 氏



### ■ふくやま・かずこ

前北星大学短期大学部長。名誉教授。1939年3月生まれ。東北芸術工科大学大学院修了。札幌市在住。著書：「学生のための被服構成洋裁Ⅰ」他。北海道服飾文化史や染織文化財に関する論文多数。

噴火湾をフィールドとして活躍する研究者に最新の研究状況と地域への熱い思いを語ってもらう「Fieldworker」。研究者の人となりとともに、研究を通して育まれた、土地と人との結びつきについて紹介します。

第一回目は染織文化財の保存修復の専門家、福山和子先生です。先生は伊達市開拓記念館所蔵の能装束をボランティアで修復してくださっています。能装束の文化的価値や研究を志されたきっかけなどについて伺いました。

### ◆ 現在、先生が修復されている能装束についてご説明頂けますか？

資料そのものは能装束で『鬼女』<sup>おにおんな</sup>といわれる役をする人が腰に着付けた舞台衣装です。

素材は絹で、表面は光沢があり、刺繍で丸紋が散らしてあります。織物自体の構造は、縦糸は撚りがかかっていますが横糸は撚りがない「練貫」という平織です。一見、縹子織に見えますが、これは室町時代から江戸時代にかけてよく織られていました。

次に模様を見ると、摺箔と刺繍丸紋が全体に配されているという特徴があります。これは江戸中期から後期にかけて、特に後期に多いものです。

制作年代についてよく聞かれるのですが、これらのことからいいますと、江戸中期から後期のものとするのが一番穏当な考え方だと思います。

### ◆ 普通の着物と能装束の違いは？

能も発生の頃は一般の小袖と変わりはありませんでしたが、歴史を重ねるにつれて伝統的で絢爛豪華になっていきますね。ですから、普通の着物と比べると身幅が広く、衿幅が広く、衿が長い、前下りが長く前が下がっているという特徴があります。装う時に腰から上をゆったり着るために必然的に前の丈が必要になったのだと思われます。

### ◆ 注目される点はどこですか？

北海道の服飾文化史上、移住武士集団が持ち込んだものとして、さらには能装束として残されていることはもちろん、織の技術、刺繍の方法、家紋の付

け方等々すべてがその時代の工業、美意識を知る手がかりとして貴重です。私にとりましてもダイヤモンドより宝物です。

また、染織文化財の保存修復の目から見ると「劣化が進んでいる点」が注目されます。これは天然染料を落ち着かせるために鉄あるいはアルミの媒染剤が使われています。そのため、その媒染剤の影響で繊維を傷めています。この「痛み具合」を見るのはとても良い資料なのです。つまり、何百年も時間を経ると繊維がどうなるのかを知ることができるのです。

ちなみに国内外の報告書では多くの類例があります。それは150～200年前に世界的に流行したからです。鉄媒染は色が綺麗に出て光沢が増す、色に重みと厚みが出るという効果があるのでよく使われました。それが今ではどの資料も劣化が進み、粉状になっているのです。

### ◆ 模様からわかることはありますか？

亘理伊達家の家紋の三引両紋が衿の後ろの中心に付いています。もし、紋が入っていなければ収集品や下げ渡し品等と考えられます。けれども、衿に家紋があるということは、伊達家の人が何らかの意思を持って準備したのでしょう。それがどんな意志かはわかりません。ただ、武士の世界はいつでも生と死が背中合わせです。もしかすると時代精神を引き継ぐために能を一つの道具として用いた、あるいは意思決定の際に用いたのかも知れません。伊達家の人たちの凄烈な武士の精神を感じます。



### ◆ もともと「服飾」が専門ということですが、「保存修復」の分野を志されたきっかけは？

偶然です（笑）。私が奉職し始めた時、教員はなんでもさせられました。服飾美学、服飾史、デザイン、被服衛生・生理学などを担当させられました。おかげで総合的に服と人間の関係を見られるようになったわけです。

もう一つは、これまで学生には「地域の人とともに生きなさい」と懇々と言い続けてきましたが、いざ自分が定年退職を控えて「自分は地域の人に何が出来るか」と考えると、何もなかったのです。学生に言った手前もあり、服飾に関して何か出来ないかということで、若い頃お世話になった地域の博物館や文化財の役に立ちたいと・・・。

お叱りを受けそうですが、以前から、染織品は文化財の中で低い扱いを受けていると感じていました。だんだん劣化して、次の世代の人たちに本物を見せることが出来なくなる。複製品ではなく、『オーセンティシティな物を見せられない』というのが気になっていました。そこで、保存修復について考えるようになったのです。

しかし、私に修理する技術があったとしても、保存修復の哲学や分析方法を知らない。そこで改めて勉強しなおそうと大学院に行きました。

大学院では保存修復に関する理論と実践を通して、その精神を教わりました。中でも、心に残っていることは、『修復することが劣化を進めることだ』ということ。それを認識した上で修復の方法を考えるべきだということです。

### ◆ 伊達で修復作業をされるのはなぜですか？

一つは、伊達にはこれまでお世話になりました。昭和50～60年代に色々な資料を見せていただき、研究の資料とさせていただきます。

伊達には全国的に見ても貴重な服飾文化史資料がたくさんあり、伊達家であるために保存されてきたということがあります。本州では資料が散逸している例が多いのです。当主も周囲の人もこれらを大切にしたいという意思があったのだと思います。

もう一つは、ここの研究所の人たちの姿勢があります（笑）。いつも市民の方を向いている。『文化財を市民のためにどう活用しようか』と常に口にしていて。それに賛同している市民の方々もボランティアをしたり、一緒に考えている。まちぐるみのエネルギーを感じます。染織文化財の保存修復者を育てようという心意気も感じます。

それに、ここの居心地が良いもので…。お蕎麦もご馳走になりますし（笑）。ともあれ、能装束を粉

にせずに次の世代に残したいと思って来ています。

### ◆ 先生にとってのフィールドとは何ですか？

私にとりましては現場で実証するという事です。知識や分析結果、研究、技術は物に対して点でしかない。フィールドワークによって、その点を駆逐することで、線や面になります。私はフィールドワークを重視しています。現地で見ないものとは言えません。私にとってフィールドは科学で分析されたことを現地で証明するという事です。



### ◆ 話は変わりますが、ご趣味は？

一番苦手な質問です（笑）。若い頃は山登り、スポーツでした。いまは無芸小食（笑）。しいて言えば、旅。組み立てられたものではなくて、フツと行く。例えば駅で一番早く来た列車に1～2時間乗って行き、その町でコーヒーを飲んで、街並みを見たり、図書館へ行ったりして帰るんです。よくやりました。今はあまり出来なくなりましたが…。

あと、ジグソーパズルが好きです。限定された中で、訳がわからないものを組み立てるのがいいですね。

### ◆ 最後になりますが、今後の目標あるいは夢は？

染織文化財の保存修復センターが、日本の各ブロックにあればいいと願っています。種々の危機管理や修復の相談に応えられる所で、分析機器が常備されていたら理想です。そんな施設ができるよう働きかけたいです。

道も市町村も文化に対してお金をかけるという発想になるには時間がかかるんですね。お金には替えられませんが、市民が育つとか心豊かになるということは一番の財産だと思います。例えば、小学生がそういう文化的知識を持って自分のまちで育つ。そしてそのまちで誇りを持って住み、起業して、そのまちで生活して、子供を育てていく。そういうことがまちの発展につながるという思想がないわけですね。

その辺のところから掘り起こしをしないとなあ、と思っています。

ありがとうございました。益々のご活躍を期待しております。